

## アイルランド語の形容詞述語文における コピュラと存在動詞の使い分けについて

村社 香帆

(言語文化学部 英語専攻)

キーワード：アイルランド語，コピュラ，存在動詞，形容詞述語文，コーパス

### 0. はじめに

アイルランド語<sup>1</sup>では、いわゆる **be** 動詞の機能をコピュラ **is** と存在動詞 **bí**(現在形 **tá**) という二つの動詞が分担している。ただし、これらを用いる文のうち「A(名詞)は B(形容詞)である」のような文(以降、「形容詞述語文」と呼ぶ)においては、コピュラと存在動詞に明確な機能分化が見られなかった時期があると推測され、形容詞述語文での用法に関してはコピュラと存在動詞の交替が見られる。(以上、中村(2007: 63)を要約)

本稿は、形容詞述語文においてコピュラと存在動詞がそれぞれ現れる例をコーパスで調査し、その使い分けの条件をより明確にすることを目的とする。なお、本文中の例文番号、図表番号、グロス、和訳、文字飾りは特に断りのない限り筆者によるものとする。

### 1. コピュラ文、存在動詞を用いる文

まず、コピュラと存在動詞それぞれを用いる文の形について概観する。

コピュラ文には定名詞や代名詞を結ぶ同定用法と、不定名詞または形容詞と主語を結ぶ分類用法がある。本稿における形容詞述語文はこのうちの分類用法の文にあたり、この場合の語順は「コピュラ—述語—主語」となる。(以上、梨本(2008: 39)を要約)一方、存在動詞の文における語順は「存在動詞—主語—補語」となる(梨本(2008: 22)を要約)。

### 2. 先行研究

本節では、2.1.節から 2.5.節で Ó Siadhail(1989)、Nashimoto(1999)、松岡(1980)、Stenson(1981)、Doherty(1996)について述べ、2.6.節でそれらのまとめと問題点の指摘を行う。

#### 2.1. Ó Siadhail (1989)

Ó Siadhail(1989)は、アイルランド語学習者、言語研究者向けのアイルランド語の概説書である。コピュラを用いる形容詞述語文に関しては、大別して感嘆、同一視、比較表現と

---

<sup>1</sup> インド=ヨーロッパ語族ケルト語派島嶼ケルト語ゴイデリック諸語に属し、基本語順は VSO の言語である。2012 年現在、アイルランドに 138,000 人の話者がいる。(以上、Ethnologue: <http://www.ethnologue.com/language/GLE> を要約)

Ó Siadhail (1989: 2-5)によると、アイルランド語は大別して Ulster(北部)、Connacht(西部)、Munster(南部)の 3 地域の方言に分類できる。1945 年には政府から標準アイルランド語(An Caighdeán Oifigiúil)が公刊されているが、これは語形変化と主要な語彙の綴りの標準を定めたもので、発音や表現については定められていないため、いわゆる「標準語」というものではない(梨本(2008: 17)を要約)。本稿では扱う方言を限定せず、調査や分析において方言差は考慮しないものとする。

いう三つの用法を挙げており、永続的な性質、または主観的判断を表わす形容詞が用いられるとしている(Ó Siadhail(1989: 229-231)を要約)。後述する本稿の調査結果では、このうち特に形容詞の性質と同一視の用法、次いで比較表現に注目している。

## 2.2. Nashimoto(1999)

Nashimoto(1999)は、アイルランド語のコピュラ文について、通時的、共時的な観点から分析した論文である。現代アイルランド語のコピュラ文において中立の叙述をする場合、形容詞を述語に取る構造は慣用表現を除いて許容されない。形容詞を用いた無標の表現は、コピュラから存在動詞に移行しているようである。(以上、Nashimoto(1999: 80, 81)を要約)

コピュラ文における形容詞述語の性質という点においては、Nashimoto(1999: 81)は「主観的判断」の形容詞が多くみられるとしている。一方で、Ó Siadhail(1989: 229)のいう「永続的な性質を表わす形容詞」というカテゴリーは、一時的性質を表わす形容詞が用いられることもあるため正当とは言い難いと述べている(Nashimoto(1999: 81)を要約)。

## 2.3. 松岡(1980)

松岡(1980: 85)は述語が形容詞である場合について、一般的にコピュラは永続的な性質を表わす形容詞を取り、存在動詞は一時的状態を表わす形容詞を取ると言えるが、必ずしも厳密ではないとしている。また、「述語が主語の性質を表わす形容詞の場合、動詞はふつう *is* である」と述べており、例として「色を表わす形容詞」、「頻度を表わす形容詞」、「比較級の場合」を挙げている(松岡(1980: 84)を要約)。その他、松岡(1980: 87)は存在動詞の主語は「特定のもの(代名詞、固有名詞、定冠詞か所有形容詞か *gach* ‘every’のついた名詞、特定のものを表わす名詞の属格のついた名詞)」であるとしている。

## 2.4. Stenson(1981)

Stenson(1981: 121)は、形容詞述語文にコピュラを使う場合と存在動詞を使う場合とで主語の特定性が異なると主張しており、コピュラが使われる場合の主語は特定の、存在動詞の場合は総称的だとしている。

## 2.5. Doherty(1996)

Doherty(1996: 36)は自身の論文について、従来の「コピュラは永続的な性質を表わす述語のみを許容するものである」という説の有効性を支持するものだとしており、形容詞述語文にコピュラが用いられる場合の形容詞を次のように示している。

*aisteach* ‘odd’; *beag* ‘small’; *cosúil* ‘similar’; *fíor* ‘true’; *fíú* ‘worthwhile’; *fuair* ‘cold’; *greannmhar* ‘funny’; *ionann*<sup>2</sup> ‘equivalent’; *leor* ‘sufficient’; *mall* ‘slow, sluggish’; *maith* ‘good’; *mór* ‘big’; *olc* ‘evil’

(Doherty(1996: 36, 37)より引用)

<sup>2</sup> 原文のままだが、一般的には‘ionann’が正しい綴りであると思われる。

## 2.6. 先行研究のまとめと問題点

まず、形容詞述語文におけるコピュラの使用条件について、本稿のようにコーパス等を用いて調査を行った研究は管見の限り見当たらなかった。形容詞の性質については、永続的な性質を持つという Ó Siadhail(1989)や Doherty(1996)の主張に対し、Nashimoto(1999)と松岡(1980)は必ずしも永続的な性質を持つ必要はないという見解を示している。一方で、コピュラと存在動詞の主語の特定性に関しては Stenson(1981)と松岡(1980)の間で相反するような主張が見られる。したがって、コピュラと存在動詞それぞれを用いた例を分析することにより、その使い分けの条件をより明確にする必要があると思われる。

## 3. 調査

調査は、コピュラ文の場合(調査1)と存在動詞を用いる文の場合(調査2)の2種類を行い、さらに調査1の結果を踏まえ、色を表わす形容詞に関する追加調査も行った。それぞれの調査は、コーパス検索と用例の主語の分析で構成されている。以下、3.1.節で使用するコーパスの説明をし、3.2.節と3.3.節でそれぞれの調査の方法と結果について述べる。

### 3.1. 使用するコーパスについて

調査には、コーパス Nua-Chorpas na hÉireann(The New Corpus for Ireland, 以下 NCI とする)を用いた。これは、フィクション・ノンフィクション・ニュース・公文書など様々なテキストを対象に、約 3,400 万のトークン<sup>3</sup>を収録するアイルランド語のコーパスである。

今回使用した NCI の concordance 機能では、キーとなる語句に加えてその前後に現れる語も検索できる。キーはレンマでも綴りでも検索可能で、レンマ検索ではキーの品詞を、綴り検索ではキーの品詞に加えて大文字と小文字を区別するか否かも選ぶことができる。一方、キーの前後に現れる語の検索では、前後それぞれ 1~15 語までの範囲を指定できる。

### 3.2. 調査方法

#### 3.2.1. コーパス検索

##### 3.2.1.1. 調査1: コピュラ文の場合

まず、コピュラ *is* をキーに指定した。その際、文中にあるコピュラの関係形<sup>4</sup> *is* を排除し、コピュラで始まる文を得る目的で、‘*Is*’の綴りで検索した。なお、検索結果が膨大になることを考慮し、本稿の各調査で検索するコピュラと存在動詞は肯定・現在形に限定した(コピュラ‘*Is*’、存在動詞‘*Tá*’)。これは、「A は B である」という形容詞述語文の性質上、肯定・現在形を最も優先すべきであると筆者が判断したためである。同時に、キーの前後についてはコピュラの直後 1 語に特定の形容詞が現れるように指定して検索をかけた。

検索する形容詞の選定には、梨本(2008: 141-152)の単語リストを用いた。リストに載っ

<sup>3</sup> Sketch Engine によれば、それぞれの語に加え、コンマやピリオドなどの句読点類を含む最小単位である (<https://www.sketchengine.co.uk/user-guide/user-manual/corpora/corpora-list/>)。なお、本調査ではネイティブスピーカーによるデータに限定して検索を行っており、その場合のトークン数は約 626 万である。

<sup>4</sup> 関係節や形容詞の最上級を作るとき等に用いる。

ている全 42 語の形容詞に加え、リストになく、かつ Doherty(1996: 36, 37)に挙げられていた *cosúil* ‘similar’, *fiú* ‘worthwhile’, *greannmhar* ‘funny’ と、松岡(1980: 84)の「色を表わす形容詞」、「頻度を表わす形容詞」で例文に使用されていた *gorm* ‘blue’ と *minic* ‘often’ を追加した 47 語(3.3 節の表<sup>5</sup>を参照)を検索対象とした。

なお、前置詞的代名詞<sup>6</sup>とともに用いることでそれが意味上の主語を含む動詞、法助動詞句になる以下の形容詞の例は、当該の前置詞的代名詞が直後に現れる例を人称、数による変化形に関わらず除外した。以下、下線で形容詞、網掛けで前置詞的代名詞を示す。

*is beag orm* ~ ‘I don’t like ~’ / *is breá liom* ~ ‘I like ~’ / *is cuma liom* ~ ‘I don’t care ~’ /  
*is maith liom* ~ ‘I like ~’ / *is olc liom mo mheanma* ‘I feel dispirited’ / *is measa<sup>7</sup> liom* ~ ‘I prefer ~’ /  
*is ceart dom* ~ ‘I ought (to) ~’

### 3. 2. 1. 2. 調査 2: 存在動詞の文の場合

前述のとおり、調査 2 においても、キーとなる存在動詞の形は肯定・現在形(綴り字 ‘Tá’) である。なお、コンピュータで用例が多い形容詞と少ない形容詞の両方を調べるため、調査 1 で検索結果の多かった上位 8 語と、少なかった下位 8 語<sup>8</sup>の形容詞を調査対象とした。存在動詞を用いる文では主語の後に形容詞が現れるため、キーの後に現れる形容詞を検索する範囲はキーから 5 語後ろまでに設定した。検索結果には、形容詞が主語の名詞の後置修飾に用いられている例等、形容詞述語文でないものも含まれる。それらを手作業で除外するにあたり、用例数の多さから全例を確認することが困難なため、最終的に取り出す形容詞述語文の数は各形容詞につき最大 50 例とした。

### 3. 2. 1. 3. 追加調査: 色を表わす形容詞について

先行研究である松岡(1980: 84)の「形容詞が主語の性質を表わす場合、動詞はふつう *is* である(例として、色を表わす形容詞、頻度を表わす形容詞、比較級の形容詞がある)」という記述に反し、後述する調査 1 の結果では色を表わす形容詞の用例が得られなかった。そこで色を表わす他の形容詞でも調査する必要があると考え、追加調査を行った。

追加調査における検索対象は、オシール(2008)に収録されている色を表わす形容詞から無作為に抽出した *bui* ‘yellow’, *dearg* ‘red’, *glas* ‘green’ の 3 語であり、調査 1, 2 と同様の手順でコンピュータを用いる場合と存在動詞を用いる場合のそれぞれについて用例を検索した。

<sup>5</sup> ただし、紙幅の都合上、一部表に掲載していないものがある。この詳細は注 10 を参照されたい。

<sup>6</sup> アイルランド語では、前置詞に続く語(‘object of a preposition’)が人称代名詞の場合、代名詞と前置詞が結びつき前置詞的代名詞と呼ばれる形になり、人称と数によって曲用する(Ó Siadhail(1989: 340)を要約)。上記の *orm*, *liom*, *dom* は、それぞれ前置詞 *ar* ‘on’, *le* ‘with’, *do* ‘to’ の 1 人称単数形である。

<sup>7</sup> *olc* ‘evil’ の比較級の形である。

<sup>8</sup> 調査 1 で検索結果が 0 件だった形容詞を調査 2 の対象に含めるため、便宜上の「下位 8 語」を設定している。調査 1 における検索結果が 0 件の 17 語のうち、無作為に抽出した 4 語(*blasta* ‘tasty’, *cairdiúil* ‘friendly’, *gaofar* ‘windy’, *rua* ‘red-haired’) と、松岡(1980)で言及された *gorm* ‘blue’ に加え、検索結果が 1 件以上の形容詞のうち下位 3 語(*glic* ‘cunning’, *saor* ‘free’, *luath* ‘quick’) をここでの「下位 8 語」とする。なお、無作為抽出には Excel のランダム関数‘=RAND( )’を使って候補となる語に乱数を割り当てる方法を用いた。

### 3.2.2. 主語の分析

調査1, 2と追加調査で得た用例の主語を、松岡(1980: 87)が挙げている「特定のもの(代名詞、固有名詞、定冠詞か所有形容詞か *gach* ‘every’のついた名詞、特定のものを表わす名詞の属格のついた名詞)」に当てはまるものとそれ以外のものに分け、分析を行った。分析対象としたのは、調査1で延べ出現数の多かった上位8語、少なかった下位8語<sup>9</sup>の形容詞を用いる用例と、追加調査で検索した *bui* ‘yellow’, *dearg* ‘red’, *glas* ‘green’を用いる用例であり、分析する用例数は各形容詞につき検索結果の上から50例までとした。

### 3.3. 調査結果

以下の表1に、それぞれの調査におけるコーパス検索結果と主語の分析の結果を簡潔にまとめた<sup>10</sup>ものを示す。コーパス検索結果と主語の分析に関する詳細は、それぞれ3.3.1.節と3.3.2.節で述べる。なお、アイルランド語 - 英語辞書 *Foclóir Gaeilge - Béarla*<sup>11</sup>(以下FGB)で「コピュラとともに用いる」とされている語は太字で、Doherty(1996: 36, 37)と松岡(1980: 84)が挙げている語は網掛けで示した。表1で用いた省略表記、略号は以下の通りである。

En.	英語	Tá	存在動詞を用いた用例(調査2)
Ir.	アイルランド語	色	色を表わす形容詞(追加調査)
Is	コピュラを用いた用例(調査1)		

表1: 各調査結果のまとめ

			コーパス検索結果				主語の分析	
	Ir.	En.	延べ出現数		原級の割合 <sup>12</sup>		主語が「特定のもの」	
			Is	Tá <sup>13</sup>	Is	Tá	Is	Tá
上位	<b>minic</b>	often	578	0	100%		2%	
	<b>beag</b>	small	415	18	95%	61%	34%	78%
8	<b>cosúil</b>	similar	366	50	99%	100%	4%	92%

<sup>9</sup> 「下位8語」には、調査1(コピュラ文の場合)で用例が0件であった形容詞も含まれているため、調査1で得た例については検索結果が1例以上あった3語の例のみを分析した。「下位8語」の設定方法についての詳細は注8を参照されたい。

<sup>10</sup> 調査1の結果のうち、次に挙げる調査2の対象としていない語の結果と、「特定のもの」に当てはまる主語の内訳については紙幅の都合上割愛した。省略した形容詞は次の31語である。(1)用例が1例以上(多い順): *cuma* ‘equal’, *fada* ‘long’, *fiú* ‘worthwhile’, *olc* ‘evil’, *leor* ‘sufficient’, *deas* ‘nice’, *breá* ‘excellent’, *ceart* ‘right’, *aisteach* ‘peculiar’, *éasca* ‘easy’, *álainn* ‘beautiful’, *dona* ‘bad’, *fuair* ‘cold’, *crua* ‘hard’, *sean* ‘old’, *deimhin* ‘sure’, *óg* ‘young’, *greannmhar* ‘funny’, *mall* ‘slow’ (2)用例なし: *béasach* ‘polite’, *blasta* ‘tasty’, *cáiliúil* ‘famous’, *céanna* ‘same’, *cliste* ‘smart’, *dathúil* ‘handsome’, *díreach* ‘straight’, *eile* ‘other’, *fliuch* ‘wet’, *nua* ‘new’, *te* ‘hot’, *tuirseach* ‘tired’

<sup>11</sup> Ó Dónaill(1977)の辞書であり、本稿では *Foras na Gaeilge*(2013)発行のオンライン版を参照している。

<sup>12</sup> 「原級の割合」とは、コーパス検索結果のうち各形容詞が原級で現れているものをさらに検索し、その形容詞の例の延べ出現数に対する割合を求めたものである。

<sup>13</sup> *cosúil* ‘similar’ と *maith* ‘good’ は調査2で設定した上限の50例まで用例を抽出した。この値は検索結果において、*cosúil* は116例中56例、*maith* は737例中130例を確認した時点での形容詞述語文の数である。

語	maith	good	303	50	14%	92%	28%	34%
	ionann	same	289	0	100%		68%	
	léir	clear	259	0	100%		2%	
	mór	big	225	47	10%	64%	32%	70%
	fíor	true	196	33	100%	100%	46%	97%
下 位 8 語	luath	quick	3	14	67%	100%	33%	100%
	glic	cunning	1	12	100%	100%	100%	100%
	saor	free	1	14	0%	100%	0%	93%
	blasta	tasty	0	1		100%		100%
	cairdiúil	friendly	0	4		100%		100%
	gaofar	windy	0	1		100%		100%
	gorm	blue	0	2		100%		100%
	rua	red-haired	0	1		100%		0%
色	buí	yellow	0	1		100%		100%
	dearg	red	0	4		100%		100%
	glas	green	16	3	88%	100%	100%	100%

### 3.3.1. コーパス検索結果

まず、コンピュータ文における形容詞については、永続的な性質を持つもの(*fíor* ‘true’等)、主観的判断を表わすもの(*maith* ‘good’等)、同一視の形容詞(*cosúil* ‘similar’等)が多く出現しており、全体の傾向として、これらの結果は先行研究を裏付けていると考えられる。ただし、上記の形容詞は存在動詞と用いられる例もあり、Nashimoto(1999: 81)が述べていたように一時的な状態を表わす形容詞も現れたため、これらの条件は絶対的なものではないと考えられる。以下にコンピュータ、存在動詞とともに *maith* ‘good’が用いられた例を示す<sup>14</sup>。

(1) Thosaigh an comhrá eatarthu:

start.PST DEF.M.NOM conversation.M.NOM between+3PL

‘Is maith é fear an tí,’ arsa duine acu.

COP.PRES good.ADJ he.3SG.M man.M.NOM DEF.M.GEN house.M.GEN say.PST person.M.NOM at+3PL

「彼らの間で会話が始まった。『その家の主人は良いですね』と一人が言った。」

(icco1235<sup>15</sup>)

(2) ‘...dúnfaidh muid an uaigh sin.’

close.FUT we.1PL DEF.F.NOM grave.F.NOM that.ADJ

<sup>14</sup> これ以降、コーパスからの用例は形容詞に下線を付して示す。

<sup>15</sup> コーパス Nua-Chorpas na hÉireann の各用例に記された‘Document ID’である。

‘Tá go maith,’ a dúirt Ned, ...’  
 be.PRES to good.ADJ REL.DIR say.PST PN.M.NOM

『…私たちがそのお墓を閉じます。』『わかりました』と Ned は言った。…』

(icci1415)

また、色を表わす形容詞について、松岡(1980: 84)の記述に反し、調査 1(コピュラ文の場合)における *gorm* ‘blue’ と *rua* ‘red-haired’ の例が 0 件であったため追加調査を行ったが、やはりコピュラ文で使用される例は非常に少ない結果となった。唯一 16 例が得られた *glas* ‘green’ は、そのうち 12 例がことわざの例であった。逆に存在動詞の文では各形容詞に 1 例以上の用例があり、「色を表わす形容詞は通常コピュラと用いる」とは言い難い。

形容詞が原級か比較級か、という観点から見ると、コピュラと存在動詞のどちらを用いる場合でも原級の割合が大きいようである。ただし、*maith* ‘good’ と *mór* ‘big’ に関しては、コピュラ文における原級の割合が非常に小さくなっている(表 1 の囲み線の箇所)。つまり、この 2 語はコピュラ文において比較表現になる傾向が強いと推測できそうである。

### 3.3.2. 主語の分析

各調査で得たコピュラ文、存在動詞を用いる文における主語を分析した結果、「特定のもの」に当てはまる割合は後者の主語の方が比較的大きい。しかし、両者の割合の間に決定的な差は見られない。よって、Stenson(1981)や松岡(1980)が指摘する「主語の特定性」の観点からは、コピュラと存在動詞のはっきりとした使い分けは説明し難いと思われる。

コピュラ文において「特定のもの」となる主語がわずかであった形容詞として *minic* ‘often’, *cosúil* ‘similar’, *léir* ‘clear’ があるが(表 1 の囲み線の箇所)、これらの例は名詞節が主部になる場合や、関係節(以下の例に囲み線で示す)を用いた強調構文である場合が多かった。そのため、これらの主部は内容の面から見れば「特定の」と言えるかもしれない。

(3) Is minic roimhe seo a bhíodh Marc  
 COP.PRES often.ADJ before this REL.DIR be.HPST PN.M.NOM  
ag gearán le Máirtín mar gheall ar Roger, agus...  
at complain.VN with PN.M.NOM as pledge.M.NOM on PN.M.NOM and

「以前、Marc はよく Roger のことで Máirtín に不満を言っていた。そして…」

(icci1333)

この例では、関係節内の「Marc が Máirtín に Roger についての不満を言っていたこと」の頻繁さを示す形容詞 *minic* がコピュラの述語として文の始めに置かれることで、形容詞が強調された強調構文になっている。

## 4. まとめと今後の課題

本稿はアイルランド語の形容詞述語文について、コピュラと存在動詞の使い分けの条件

をより明確にするため、それぞれを用いる例をコーパスで調査し、「色を表わす形容詞」に限定した調査も行った。その結果、次のようなことが明らかになった。

- ・ Ó Siadhail(1989)が述べたような永続的性質を表わす形容詞や同一視の形容詞はコンピュータ文に用いられやすいが、存在動詞と用いる場合もあり、厳密に使い分けられているとは言えない。
- ・ 色を表わす形容詞については、松岡(1980: 84)のように「通常コンピュータと用いる」とは言い難い。むしろ、存在動詞とともに用いられる傾向が見られる。
- ・ 松岡(1980)や Stenson(1981)が論じた主語の特定性という観点からは、今回の分析の基準(松岡(1980: 87)の「特定のもの」)では明確な使い分けは説明し難い。

ただし、調査の問題点として、①調査1の検索結果に混在する形容詞述語文ではない例を除外できなかったこと、②用例の分析量が十分でないこと、③アイルランド語の解釈を筆者が行ったため、用例の読解において不明瞭な点があったことが挙げられる。これらを今後の課題として、より幅広いデータ収集と正確な分析を行うことが望ましい。

#### 略号一覧

+ : fusion 融合 / 1: 1st person 1人称 / 3: 3rd person 3人称 / ADJ: adjective 形容詞 / COP: copula コピュラ / DEF: definite 定 / DIR: direct 直接 / F: feminine 女性 / FUT: future 未来 / GEN: genitive 属格 / HPST: habitual PAST 習慣過去 / M: masculine 男性 / NOM: nominative 主格 / PL: plural 複数 / PN: proper noun 固有名詞 / PRES: present 現在 / PST: past 過去 / REL: relative 関係 / SG: singular 単数 / VN: verbal noun 動名詞

#### 参考文献

Doherty, Cathal (1996) Clausal structure and the Modern Irish copula. *Natural Language & Linguistic Theory* 14: 1-46. / 松岡利次 (1980) 「アイルランド語の存在詞と繫辞」『法政大学教養部紀要』36: 79-90. / Nashimoto, Kuninao (1999) On the historical syntax of the copula in Irish: Descriptive studies on selected prose texts from diachronic and synchronic points of view. Ph.D. diss., National University of Ireland, Galway. / 梨本邦直 (2008) 『ニューエクスプレス アイルランド語』東京: 白水社. / Ó Siadhail, Mícheál (1989) *Modern Irish: Grammatical structure and dialectal variation*. Cambridge: Cambridge University Press. / オシール, ミホール (2008) 『アイルランド語文法 コシュ・アーリゲ方言』京都アイルランド語研究会 (編訳), 東京: 研究社. / Stenson, Nancy (1981) *Studies in Irish Syntax*. Tübingen: Gunter Narr.

#### インターネット上の資料

Ethnologue: <http://www.ethnologue.com/language/GLE> (最終閲覧日: 2017/01/06) / Foras na Gaeilge (2013) Foclóir Gaeilge-Béarla: <http://www.teanglann.ie/> (最終閲覧日: 2017/01/03) / Nua-Chorpas na hÉireann: <https://foclóir.sketchengine.co.uk/> (最終閲覧日: 2017/01/03) / Sketch Engine: <https://www.sketchengine.co.uk/user-guide/user-manual/corpora/corpora-list/> (最終閲覧日: 2017/01/06)